

恩納村第5次総合計画・基本構想

青と緑が織りなす活気あふれる恩納村

—我した恩納村 青緑清らさ 肝心据えて 文化（花）ゆ咲かさ—

平成 24 年度（2012）

～

平成 33 年度（2021）

【1】基本理念

本村は風光明媚な自然環境に恵まれ、穏やかな暮らしぶりとともに観光リゾート地として成長してきました。また平成24年に沖縄科学技術大学院大学が開学し、新たな時代が始まろうとしています。

一方、少子高齢化が進んでおり、子育てや高齢者福祉等の社会保障に、これまでにない課題が予想され、地域で協力した取組みが求められてきます。加えて地方分権の進展は、これまで以上に地方自治体の自主性が重要とされ、住民と協働した地域づくりが重要となります。

また情報技術の発達、情報の国際的同時性をもたらしており、教育や生活、産業等に及ぶ広い範囲での変化に対処していくことが必要です。さらに地球温暖化防止等地球規模の環境課題があり、それぞれの地域における環境保全やエネルギー資源の活用が求められています。

こうした時代の要請や地域の諸課題等に対処して、村民一人一人が幸せに暮らせるよう、本村における総合的および計画的なむらづくりに向けての基本理念を次のように掲げます。

1) 優しさと誇り

経済が成長し社会変化の激しかった時代から、今日、物の豊富さだけでなく心の豊かさを求める成熟した社会へと至っています。

成熟型社会では、競争から共存へ、個人活動からボランティア等の社会活動へと、行動価値観も拡張しつつあります。また人口移動から定住化が進み、地域に住むことのアイデンティティ（存在感）が大切になってきています。

こうした社会の変化に応え、人や社会、自然に優しいむらづくり、ふるさとを誇れるむらづくりを基本とします。

2) 人づくりと協働

本村の人口は1万人余で、財政規模は小規模です。また進学、就職時に若者達が他地域に出て行くことから、高齢化への対処は構造的な課題でもあります。また行財政改革による緊縮財政から、行政の事業だけではむらづくりに限界が予想されます。

地方分権にともない、これからは地方自治体の自主的な取組みが重要になると同時に、住民自治や防災共助等、村民との協働むらづくりが重要となります。

人口が少ないとはいえ、地域の共同性は継承されており、僅かながら人口は増加しています。増加人口の定住化をはかり、子育て、健康づくり、次世代を担う人材育成等の人づくりとともに、協働むらづくりを基本とします。

3) 交流と活力

本村は、その自然景勝が早くから注目され、リゾートホテルやゴルフ場の立地が相次ぎ、国内でも有数の観光リゾート地として成長してきました。こうした成長と相伴って、リゾート施設周辺等に飲食店や観光関連業が立地し、またスポーツ団体のキャンプ時の地域交流等により活気が生まれてきています。

さらに本村には、沖縄宇宙通信所、沖縄電磁波技術センター、沖縄科学技術大学院大学の高次学術機関が立地し、出前講座等独特の交流機会が生まれています。

こうした観光リゾート施設や学術機関の集積を活かした地域交流の推進により、活力ある地域発展とともに、村民が心広く夢を育むむらづくりを基本とします。

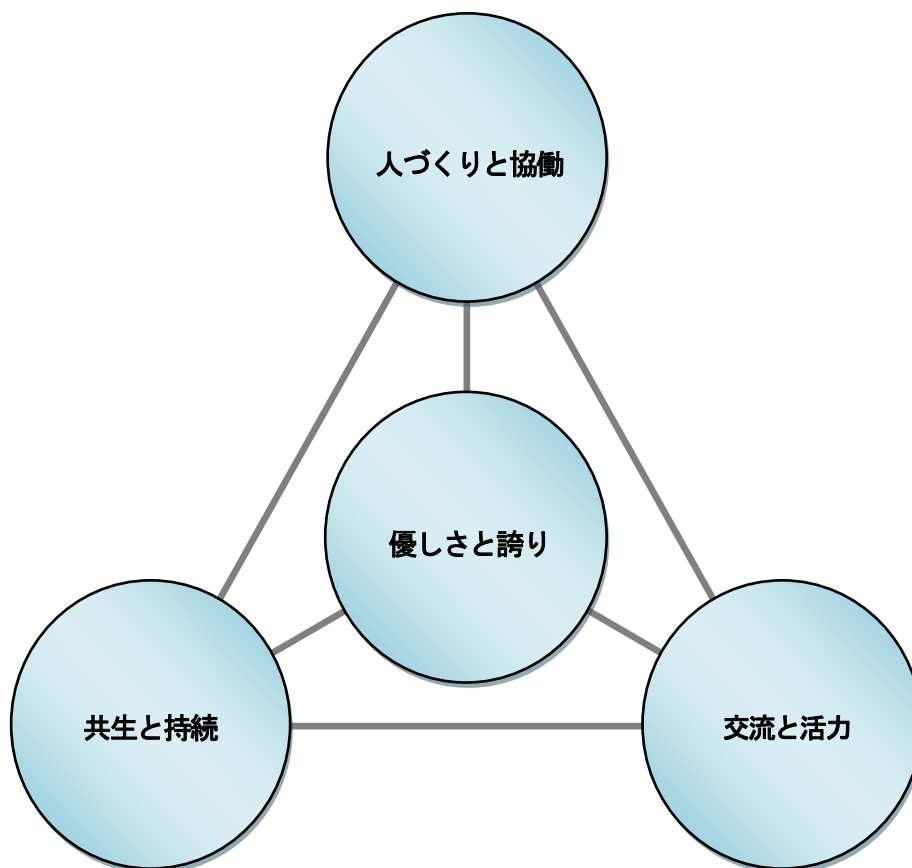
4) 共生と持続

本村の最大の特徴は、サンゴ礁海域をはじめとする恵まれた自然資源にあります。この自然資源のあり方は、本村の盛衰に関わるともいえます。

これまで開発に際しては、用途用域等の本村独自の条例により、土地利用をコントロールしてきました。また海域においては、水産業や観光事業とあわせてサンゴ再生活動が行われ、その成果をあげています。

こうした取組みを充実させるとともに、生態系を再生する海岸・河川の改善等生き物目線からの環境整備、また観光に係わる歴史・文化資源の保護と活用等、自然環境や地域の暮らしと共生する持続的なむらづくりを基本とします。

基本理念



【2】将来像

青と緑が織りなす活気あふれる恩納村

—我した恩納村 青緑清らさ 肝心据えて 文化(花) ゆ咲かさ—

「青と緑が織りなす」とは、サンゴ礁の海の青さ、山々の緑に象徴される恩納村の豊かな自然環境が大切に守られ、将来へと引き継がれていくことを表します。

「活気あふれる」とは、恩納村の歴史・文化と村民のきずなを育み、観光リゾートや沖縄科学技術大学院大学との国際的な交流を通して、生きいきと発展する姿を表します。

【3】人口の見通し

本村では、リゾート施設周辺の飲食店や関連業の立地にともなう経営、雇用機会の増加から、人口は僅かながら安定して増加しています。また、この増加は30代、50代の中堅層の転入によるものとなっています。これまでの人口増加傾向を踏まえるとともに、今後の沖縄科学技術大学院大学の学生等の居住、民間住宅地開発による転入を考慮して、平成33年(2021)の将来人口を12,000人とします。

【4】基本目標

【1】教育・文化：歴史と文化が薫り英知を育む村

人づくりはむらづくりの基本です。幼稚園・小学校の少人数を活かしたきめ細かな教育と中学校統合による視野の広がる教育とあわせ、学校・家庭・地域が協力した教育環境づくりにより、「心・知・体」を身につけた次世代を担う子ども達を育成します。

また「いつでも、どこでも、だれでも」学べる環境づくりを進めるとともに、「赤間総合運動場公園」を活用したスポーツ活動を推進し、各種団体の育成とともに生涯学習の充実をはかります。

本村には「山田城跡」、「国頭方西海道」、「万座毛」、「恩納ナビ^{うんな}ー」等、固有の歴史・文化があります。国指定となった「山田城跡」の復元整備をはじめとして、沖縄口、ハーリー、豊年祭等の歴史・文化資源^{うちなーぐち}の継承と活用により、恩納村を誇りとする人づくりを進めます。

【2】保健・医療・福祉：皆が安心して暮らせる健康の村

人々の健康は地域活力の源です。若いころから健康に関する運動や食事の知識を身に付けさせるとともに生活習慣病の予防に努め、村民の健康増進をはかります。また健康の維持や疾病の予防・早期発見に取組み、圏内医療機関と連携して地域保健医療の向上をはかります。

本村においても少子高齢化が進行しています。保育ニーズに対処した子育て支援サービスや体制の充実をはかるとともに、高齢者の社会参加、介護予防の充実により、子どもから高齢者まで安心して生きがいのある生活が営める環境づくりを進めます。

また地域には生活に困窮している人や心身にハンディキャップを持つ人々が生活しています。これらの人々が社会に参加し、地域で自立した生活を送ることができる環境づくりを進めます。

[3] 産業・経済：人々が集い活力ある豊かな村

農業は風土や暮らしと結びついた産業です。小菊やパッションフルーツ、切葉（ドラセナ）等の販路拡大による農業振興をめざすとともに、「おんなの駅 なかゆくい市場」やホテルへの直売等、高齢者や女性が参加できる多品目生産による農業の活性化をはかります。

本村の漁業はサンゴ礁海域を主漁場として第一次産業の一翼を担ってきました。「海ぶどう」「モズク」をはじめとする養殖漁業や、資源管理型漁業・観光漁業の継続・発展をめざすとともに、サンゴ再生活動によるサンゴ礁海域の保全に取り組めます。

本村は国内有数の観光リゾート地として成長してきました。催し物や店舗の案内等リゾートホテルと連携した商工業の振興をはかるとともに、メインルートとなる現国道58号沿い街づくりや「緑の回廊づくり」により、地域に滞在、周遊する観光振興をはかります。

また、花卉や熱帯果樹類、水産物の生産は本村の資源、環境を活かした産業であり、高品質生産と物産パッケージ、産直等、農林水産と商工・観光を立体的に掛け合わせた第6次産業化を進めます。

[4] 生活環境：美しい自然と共生する潤いのある村

長大な海岸線を有する本村の美しい自然環境を保全するとともに、生態系に配慮した環境整備や景観の保全と育成により、自然と共生するむらづくりを進めます。また用途地域による土地利用の秩序立てにより均衡ある地域の発展をめざします。

道路等の社会資本整備は大きく進みました。さらに生活排水処理施設整備の推進、ゴミ分別の徹底や再資源化の促進、墓地整備の促進等、生活周りの整備を進め、資源循環型で潤いのある生活環境づくりを進めます。

村民の生命、財産を災害等から守るため、救急救命活動の高度化とあわせた消防体制の確立をめざします。さらに地域防災体制および防犯体制の強化、交通事故の発生抑制に取組み、安心・安全なむらづくりを進めます。

[5] 自治体運営：村民が参加し協働して築く村

地方分権の進展に伴い住民自治の充実が求められています。本村の集落は住民自治の主体となっており、芸能文化の継承、子育てや老人福祉等の相互扶助、自主防災活動等を支援し、それぞれの地域実情に応じた住民活動、住民自治の充実をめざします。

本村は人口 1 万人規模の行政村として、今後とも行財政運営を行っていきます。行財政改革の推進、民間活力を活かした施設運営、施設整備への財源対処等、住民と行政の役割分担と協働によるむらづくりを進めます。

本村は行政区域が細長く、村境界域での消防活動等に困難な面があることから、消防活動の沖縄県での広域化に対処しつつ、隣接市町村と協力する広域行政の確立をめざします。

1
教育・文化2
保健・医療・福祉3
産業・経済4
生活環境5
自治体運営

【5】重点施策

1. 恩納ブランドの推進

小菊、パッションフルーツ、ドラセナ、海ぶどう、モズクの沖縄県拠点産地認定、恩納モズク（恩納1号）の品種登録等、高品質、安心・安全な特産品づくりは、恩納村のブランドとして県内外に知られるようになりました。今後、ますます付加価値が高く、特色のあるものづくりが求められます。特産品に止まらず、本村の特色であるサンゴ礁の海を積極的に打ち出した「サンゴの村宣言」等により、本村を象徴する恩納ブランドづくりを推進します。

2. 景観づくりの推進

長大な海岸線とイノー、集落のたたずまい、背後の山並み等、本村の恵まれた自然環境と景観は古くから農林漁業や暮らしを育み、近年は観光リゾートにおけるかけがえのない資源となっています。これまで精力的に進めてきた漁港整備事業、ほ場整備事業、道路整備事業等の基盤整備事業は、ほぼ一段落してきました。これからは本村の自然環境と景観の特性を最大限に活かし、長大な海岸線が水と緑の回廊となるような体系的、計画的な景観づくりに取組みます。

3. 沖縄科学技術大学院大学交流

世界最高の研究水準をめざす沖縄科学技術大学院大学が開学し、恩納村の歴史に国際的な1ページが開きます。開学により世界各地から研究者やその子弟が来村し国際的な交流機会が増加するものと予想できます。また研究成果と連携する企業進出等が期待されます。こうした開学効果を活かし、国際交流による異文化の理解を深め、また村民が広い知識に接し夢を育てていけるよう、さらに関連産業等の立地促進に向け、沖縄科学技術大学院大学との交流を推進します。

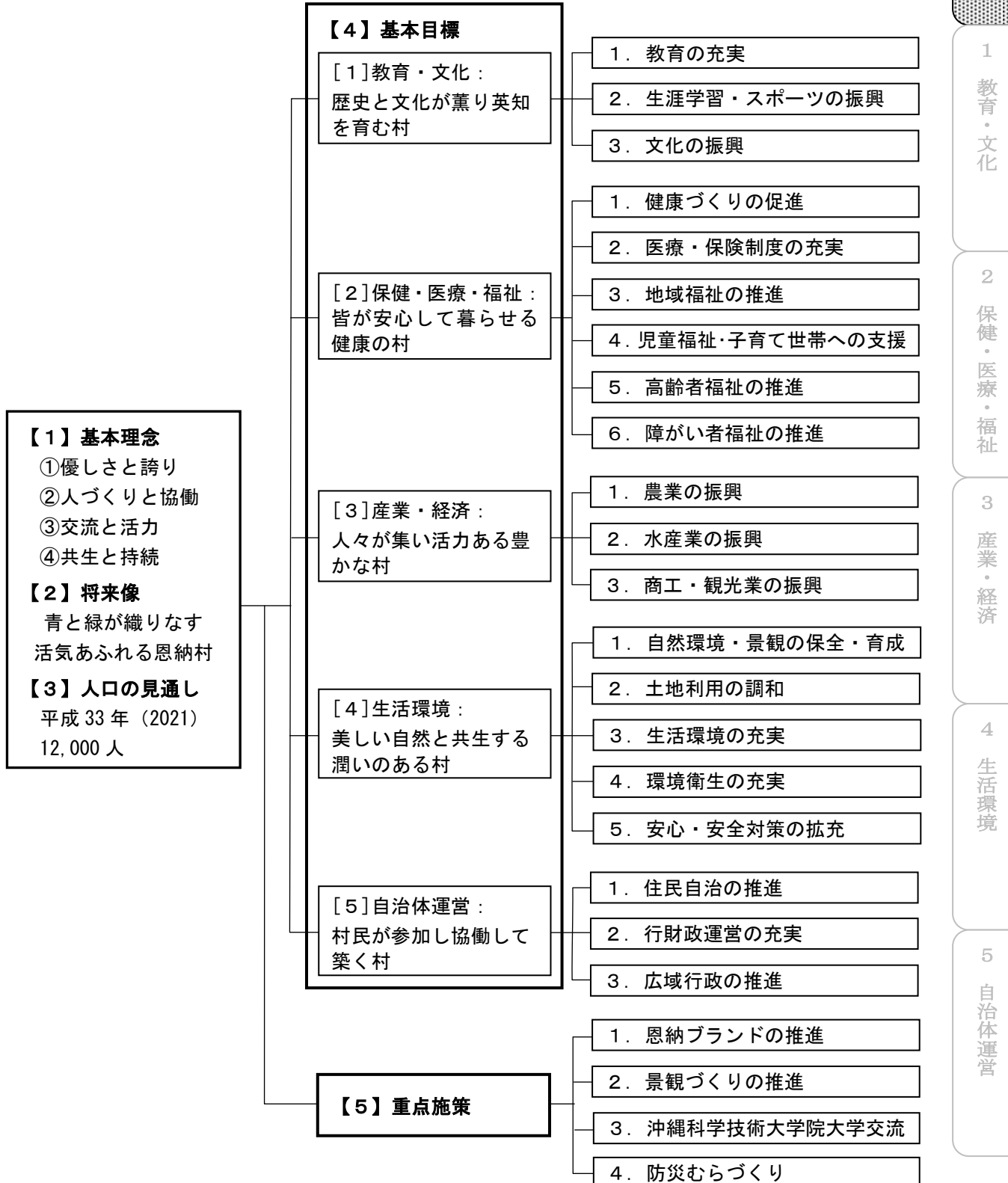
4. 防災むらづくり

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は津波による未曾有の災害をもたらしました。沖縄においても過去には明和の大津波の災害が記録されており、近年はチリ地震での津波の影響を受けています。本村のほとんどの集落は海辺に面しているため、日頃から津波等災害に備えることが重要です。津波の高さや土砂崩れ箇所の再検証、安全な避難場所の確保等による地域防災計画の見直しをはじめ、自主防災組織の設置による防災訓練等により、災害に強いむらづくりに取組みます。

[6] 施策の大綱

施策の大綱は次図に示すとおりです。基盤整備がほぼ一段落してきたことから、今後はソフト面での施策が重要となります。また重点施策は、各施策を連携して組み立てられます。

恩納村第5次総合計画基本構想施策の大綱



[7] 計画の期間および位置づけ

1. 計画の期間

恩納村第5次総合計画は基本構想と基本計画とで構成し、基本構想の計画期間は、平成24年度（2012）～平成33年度（2021）とします。

この計画期間を5ヵ年で区分し、前期基本計画は平成24年度（2012）～平成28年度（2016）、後期基本計画は平成29年度（2017）～平成33年度（2021）とします。

恩納村第5次総合計画の計画期間

基本構想 平成24年度（2012）～平成33年度（2021）	
前期基本計画 平成24年度（2012）～平成28年度（2016）	後期基本計画 平成29年度（2017）～平成33年度（2021）

2. 計画の位置づけ

恩納村総合計画はむらづくりの目標像を示すとともに様々な事業を導き、あるいはそれら事業の調整役を果たしてきました。地方自治法の改正（平成23年4月28日成立）により議会の議決義務がなくなりましたが、計画行政を進める上でその果たす役割は重要です。

様々な事業を地域で総合し、むらづくりや行政サービスを効果的に進めていくことは地方自治体の役割であります。今後、むらづくりに向けた事業導入や行政サービスの充実に向け、恩納村第5次総合計画を向こう10箇年の計画行政の指針とします。